

山居乱信

1

僕の家は破れ家だが
窓ガラスは透明にみがいてある
月の光が射し込んで来て明るい
「まるで月が坐り込みに来てゐるみたいだね」
煙草を吸ひながら僕は
家の者に言った
まだ灯はつけてゐないので
家の者のほほ笑みは硬質のものに感じられた

2

「誰かにのぞかれてゐるみたい」
僕もそれを感じてゐた
夜はしづかであつた
障子にかこまれた旅室
「うつ」といふやうな
何ものかがかすかに動くやうな気配がある
抱きあつたまま夜の明けるのを待つた
障子を開けてみると
池の面がひろがり蓮の花が咲いてゐた
水鳥がつかひでこちらに首を向けてゐた
「もしかすると」
と僕は言つてひきよせて
「見てごらん 夜中に誰かにのぞかれるやうに感じてゐたのは本当は彼等の方だつたかも
しれない」
枯野を越え 山道を辿り 逃げて来た者たちにとっては
水鳥の蓮池の住居がうらやましく思へてならなかつた

3

オルゴオルの上の小さい男と女
彼等は曲につれて動く
踊つても近づくことはないのに まるで
抱きあつてゐるかのやうにやさしく回転する
円筒のガラスが彼等の小宇宙を覆つてゐる
数十年前の僕の贈り物だつた
数か月たつて僕はきいた
「彼等は僕等の心のやうに動いてゐますか」
あかるい表情の答がかへつてきた

「主人が窓から路に投げつけてしまったわ 夜中に喧嘩して」

「その時君はどうしてゐたの」

「笑って見てゐたわ 男の姿が哀れでね」

ガラスが路上に散乱し

オルゴオルの人形が破壊され

一瞬断末魔の踊りのかすかな動きをしたであらう

男と女が本当に抱きあつて

かすかな動きをしたであらうことを

その時 僕はあざやかに想像した

僕は言つた

「毀れたつて毀れないものね」

月のあかるい夜には

僕はくりかへしくりかへしこのことを思ひ出す

4

「カーテンをしめませうか」

家の者が言つた

二人は両方からカーテンをしめた

室の中に月は入り込んでゐて

出て行かうとはしない

「同じことだつたわね」